

慣用音と呉音とのはざま —現代漢和辞典と近世法華経字音—

宋在漢, 中澤信幸

日本漢字音を系統別あるいは種類別に分けると、一般的に呉音・漢音・唐音という三つの枠が設けられる。しかし、これらの体系から外れている、いわゆる「慣用音」というものも存在し、通常、漢和辞典でよく見られる。この慣用音においては、①辞典の慣用音と現存文献の字音との間に食い違いがある、②同じ漢字において、辞典ごとに記載された慣用音が異なる、という問題点がある。

本発表では、常用漢字 2,136 字の中、8 種の漢和辞典のいずれかで慣用音として認めている 478 字を抜き出し、このうち幾つかの用例を対象にした。それらにおける慣用音と呉音について、近世法華経字音学及び近世字音仮名遣い関連の文献との対照を通じて、相違点やその淵源について考察を行った。

漢和辞典における慣用音の存在は、近世字音仮名遣いの方法論をそのまま踏襲した結果である。そして、伝統的な字音（呉音）は、現代漢和字典では慣用音に繋がるものが多い。近世法華経字音には、伝統音と韻書による改変音とが共存する。（宗派によって異なる。）これらが後世慣用音とされている例もある。

つまり、演繹によって生じた字音と文献呉音とのズレから発生したものが慣用音なのである。したがって、慣用音については、検証できる範囲で実証的な検討を始めるべきであり、このような帰納的な方法が、漢和辞典における字音の客観性を確保することにも繋がるのである。